

第14回 明治大学文学賞

阿久悠作詞賞受賞作品について（三田 完）

阿久悠が70年の人生の最後に書いた詞は、新宿ゴールデン街で酒場を営みながら昭和歌謡をうたいつづけた渚ようこのための「KABUKU」という作品でした。

KABUKU女 そんな仇名が
ちょっと似合いだね
素顔なんて しょせん同じよ
恋に生きる身は

なぜ阿久悠最後の作詞に触れたのかということ、大賞受賞作をうたう太田仁子さんに「チミモウリョウ」の詞をメールで送ったとき、即座に「おお、カブいてますね」と返事が来たからです。彼女の言葉のおかげで、はるか彼岸の阿久さんも今回の受賞作をことほいでいるような気持になりました。

今回、総計62篇の応募作品を拝見して印象に残ったのは、「大人になりたくない」という内容の詞がいくつかあったことです。それはユーマンの「あの日にかえりたい」とは異なるセンチメントでした。日本も地球も、そして民主主義までもネジがゆるんできた今、未来を展望するのは至難の業。そんな不安から大人になりたくない願望が生まれるのだろうか……などと、あれこれ考えました。

誰もがいやおうなく変化に対峙しなければならない現代、懐旧の殻の中に籠もる心地よさは重々理解できます。でも、せめて歌の中では意表を突く仮装をし、思い切り自由奔放なふるまいをしてみてもはどうでしょう。カブいた詞の中に、思いがけなく真の自分が見つかることもある。混沌とした未来にとまどいながら、それでも前へ突き進むあなたが。

大賞

「チミモウリョウ」

今回の応募作の中で、一番奔放、というか、行っちゃってる詞でした。しかし、読みながら自然にメロディーが浮かんでくるところに、作者の才を感じます。

「魑魅魍魎」という課題を思いついたとき、私の胸には、泉鏡花「天守物語」の令和版というほのかなイメージがありました。美貌の姫とけなげに花咲く秋の千草、そして異形の者たちを身近に感じるような諧謔。

結果、ハロウィンの渋谷よりずっとゴージャスな行進に巡り会えたことは幸せでした。思わず「シタニシタニ」と頭こうべを垂れる次第。

佳作

「キミユキ」

見慣れない言葉を用いたタイトルに惹きつけられました。雪が降れば見慣れた町の風景も泰西名画のようになる——そんな風景のなかで出会った「君」。

静かでスタティックな構図にもっと徹したほうがよかったのでは、と思います。雪の向こうにいる君は手を振ってくれなくてもいい。作者のちょっとした雑念で詞を貫く緊張がゆるんだ印象があり、残念。

「学生街のカフェテラス」

映画に譬えればモンタージュが巧い作品です。ともすれば陳腐になりがちな恋愛の回想が、チェロ、絵葉書、ボートなどを重ねたことで、それなりの説得力を持つ詞になりました。

しかし、「キミユキ」とは逆にタイトルが悪かった。昭和のアイドルソングみたいで、せつかく構築した世界の艶が消えてしまいます。単純に「絵葉書」でよかったのでは。